

共同宣言発出式（全体会議議事録）

（司会進行）

共同宣言の発出式に先立ちまして、まず、お集まりの皆様と県内のコロナ差別・誹謗中傷の状況について認識を共有させていただきたいと思います。

本日、お集まりの皆様から、差別や誹謗中傷を受けた事例について、御紹介をいただきたいと思います。

（渡邊総合政策部長）

県に寄せられた、新型コロナウイルス感染症に関する相談事例について、3点ほど御紹介させていただきます。

① 地域生活における事例です。アパートに住んでいる親子がコロナに感染し、入院した。その後、回復し、退院したが、アパートに帰ったところ、自治会の役員からアパートのエレベーターを使用しないよう申し入れを受けた。それに関する相談を受けています。

② 県外から帰省された方の事例です。この方は仕事柄どうしても県外との往来が必要だったのですが、その子供さんが通っている児童園から通園を断られてしまった。そうした事例に関する相談がありました。

③ 職場における事例です。会社員の方が、鼻水や嗅覚異常があったため、PCR検査を受けたところ、陽性だった。その旨、会社に伝えたところ、上司から様々な非難の言葉を投げかけられてしまい、とても辛い思いをした。せっかく勇気を出して検査を受けたのに、こんなことになるなら、いっそ検査を受けなければよかった。そうした事案に関する相談がありました。

これ以外にも、県には様々な御相談が寄せられておりますが、県としましては、相談者ののに寄り添った対応に努めていきたいと考えております。併せて、こうした不当な差別や偏見などの人権侵害が起こらないよう、引き続き、啓発に取り組んでまいりたいと考えております。

（県医師会 河野会長）

医療従事者としての立場からお話しさせていただきます。

まずは、多くの県民の方から、医療従事者に対する感謝や応援の気持を様々な形で表していただいていることに感謝を申し上げます。

ほとんどの県民は、このような理解がある方ばかりです。しかし、コロナが身近に迫った場合には、残念ながら違った反応が起こってしまいます。

日本医師会が昨年、コロナによる医療に関する風評被害についてのアンケート調査

をしました。それによると、医療従事者に対する誹謗中傷は、特に看護師さんに対するものが最も多かったようです。後ほど、中武看護協会会長さんからも、お話があると思いますが、看護師さんは医師と同様に患者さんに直接接しなければならない大変な仕事をされています。長期間にわたるコロナ対応で疲れが限界に達する中で、何とか使命感で持ちこたえているのが現状です。

医療従事者の家族への差別も深刻です。子供が幼稚園に通うのを拒否されたり、高齢の御家族が介護施設に通うのを拒否されたりするような報告も上がっています。こうした状況が続けば、医療従事者は病院で働くことができなくなります。

コロナに感染した患者さんへの差別もあります。病に苦しんでいる方に追い打ちをかけるような言動は絶対に避けていただきたい。

本日、多くの関係団体の賛同の下、この宣言がなされ、その精神が県民に広く深く伝わることによりまして、医療従事者がより働きやすく、患者さんも安心して治療に専念できるようになって欲しいと思います。

（県看護協会 中武会長）

先ほど、河野会長からありましたように、県民の皆様から医療従事者への感謝や励ましのメッセージをいただいておりますことに心より感謝申し上げます。

一方で、こうした事例が起きています。

- 親が病院で働いているというだけで、子供が感染者扱いされた。
- 病院勤務ということが分かると、避けられるようになった。
- 買い物先で「医療従事者が外出していいのか」と言われた。

というようなことがあります。

実際、感染者に対応している看護職へ、看護協会の方から病院に電話をかけて「何か困っていませんか。誹謗中傷はありませんか」と訊いても、なかなか上がってこないんです。

今、実態調査を行っているのですが、協会のホームページから、入力していただくということで、いろいろな声が上がってきています。これだけ、みんな我慢していたんだなど、心を痛めています。

看護職は、コロナの患者さんに対応した後、家族にうつさないように、真冬の寒いときでも、病院でシャワーを浴びて帰っているのです。そういう気を遣いながら、日々を送っているわけです。病院からは「会食はダメ」「県外との往来はするな」と非常に厳しい中で、「自分がもし感染したら職場に迷惑をかけるかもしれない」ということを考えながら日々を送っているというところで、傷ついているということが見えてきました。

新型コロナウイルスという見えないウイルスに対して、不安や恐れを感じるのは当然のことですが、日赤の方で言われているのが、今度のコロナの感染の3つ、「病気

そのものの感染」「不安に対するもの」「不安から来る差別」これが負のスパイラルになると言われていますので、やはりお互いが思いやりを持つということがすごく大事であるということと、私たちが向き合う相手は「ウイルス」だということを再認識していただいて、正しい知識で冷静な行動をお願いしたいと切にお願いします。

(県トラック協会 牧田会長)

我々トラック業界もエッセンシャルワーカー、エッセンシャルサービスということで、丁度昨年5月の連休前頃、毎日、非常に厳しい相談が県内のトラックドライバーからありました。

13都道府県に行った者、また、その方と同居している者は、学校に来てくれるなどというのがあり「子供を学校にやれない」「保育園にやれない」という相談がいっぱいありました。トラックは、毎日、福岡だ、大阪だ、東京だ行って、帰ってきますので、「家に帰れない」という相談がありました。「どうしましょうか」という話があったのですが、「学校は学校側で守ろうとしているわけだから、どうにか皆、協力していけ。実家に帰るなりして、一緒になって協力していこう」という話をして、協会の方ではそういう話にも反発せず協力していくんだということを決めて行動したわけですが、「これではいかんな」と思っていました。

私が朝NHKのニュースを見ていましたら、四国松山で「シトラスリボン運動」ということで「差別をなくそう」とやっていると聞いたので、「よし、これをやろう」ということで取り組みました。

私たちの会社の5台ほど、どの色がいいかなと、何種類か色を変えてやってみたのですが、やはり基本の緑色のカラーで、今、ラッピングトラックが70台、そして、今日、お配りしているポスターが1500枚、ステッカーが1000枚作り、差別をなくそうという運動を協会で行っているところです。

最近、コロナにかかった方々から「ありがたい」「力強い」という声を何件かいただいていますので、確かに力を分け合うことになる一つになるのではないのかなと思います。

そして、また、このような運動をしている我々トラック協会の会員たちは、差別はしないだろうと信用して、この運動をさせていただいています。どうぞトラックも眺めてみてください。

(県教育委員会 日隈教育長)

私は、県立学校のことでお話をさせていただきたいと思います。

県立学校の教員の中でも、新型コロナに感染した例がありまして、民間事業者と同じように学校名を公表した例がありました。そうした場合は、学校自体にかなりの誹謗中傷もありましたし、いろいろなインターネット上の書き込みもされたところです。

また、高校生が感染という例があった際には、例えばコンビニエンスストアで、別の県立学校の生徒なのに、お客さんの方から「高校生は入ってくるな」「高校生はウイルスを持ち込む」というような言われ方までしたという例も報告があります。

また、インターネット上では、事実と異なるような情報が拡散しているというようなこともあって、実際それを訂正するわけにもいかないし、また、誹謗中傷に対してはどう対応するか、非常に悩んだ1年でした。

県教育委員会では、今後とも継続して、誹謗中傷、偏見、差別に対する防止にはしっかり取り組んでいきたいと考えているところです。

個人攻撃が一番良くないと思いますし、今のところ、生徒個人へ深刻な誹謗中傷という報告はないのですが、学校全体で、組織全体で取り組んでいく必要があるのかなと考えています。

(河野知事)

それぞれの御発言、御指摘、ありがとうございました。具体的な事例、状況をお伺いしながら、改めてそうした差別、誹謗中傷をなくしていかなければならない、正確な情報をお伝えする、そして、しっかりと思いやりと温かい心でそれぞれ接していく、行動していくことが大切であるという思いを強くしたところであります。

この「STOP！コロナ差別～オールみやぎき共同宣言～」の内容は、お手元にお配りしているとおりであります。

闘っているのは「人」ではない「ウイルス」なんだということ。そして、感染した方々等への誹謗中傷は許さないというような内容を、改めて確認する、県民の皆様にお届けする、そして、我々心を一つにして取り組んでまいりたい。一丸となってコロナ差別解消に取り組みたいと考えております。このような内容でよろしいでしょうか。

(拍手)

(河野知事)

ありがとうございました。